台大日本語文研究第 38 期
2019 年 12 月，頁 105-131
2019-09-04 收稿，2019-12-02 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP. 201912_(38).0005

關於明治武士道之一考察
－《現代大家武士道叢論》與浮田和民之武士道

簡曉花*

摘要

以忠孝為頂點之明治武士道逐漸確立滲透，終至二戰期間竟成為政治宣傳工具，明治武士道究竟是如何的由帝國新時代之道德轉折蛻變成軍國主義精神？啟人疑竇，不可忽視。歷來之研究，雖已有觸及明治武士道之內容，但幾乎是自武士道與國家主義之融合等進行論述，罕有言及武士道自身之轉折。本研究則以此時期之《現代大家武士道叢論》及浮田和民之武士道論述為對象，重新展開探討。其結果獲知，佐藤對浮田論戰實際上是基督教價值觀的浮田和民對武德中心的武士道所進行的改革挑戰；浮田是主張一種工商業導向的人格道德中心之武士道，然而，此武士道論在論戰中受挫，同時也意味著軍方的武德中心之武士道獲得多數認同，武士道在此曲折轉向為以武德為中心，並間接的成為日後軍國主義之源頭。

關鍵詞：明治武士道、《現代大家武士道叢論》、浮田和民

* 中華大學應用日語學系教授

臺灣大學學術期刊資料庫

A Study on the Bushido in Meiji：Focus on *Gendaitaikasoron* and the Bushido of Ukita Kazutami

CHIEN Shiaw Hua*

Abstract

The Bushido in Meiji, with“Chuko (loyalty and filial piety)” as the apex, established itself and permeated gradually. Finally, it became political propaganda during WWII. How did the Bushido of the Meiji era transform into militarism via the imperial morality of a new epoch? It is doubtable, and should not be neglected. In past studies, although there were discussions of the contents of Meiji Bushido, hardly any of them approached the issue from the perspectives of the integration of Bushido and nationalism, not to mention exploring the transformation of Bushido itself. This study would like to reappraise the subject from the perspectives of Gendaitaikasoron and the Bushido of Ukita Kazutami. The results indicate that Sato’s opinion of Ukita’s treatise on war was actually a challenge on the reformation of Bushido that centered on “Butoku” (martial virtue) along with the values of Christianity. In fact, Ukita advocated a kind of business-oriented Bushido, with an emphasis on personality and virtue. This kind of Bushido encountered setbacks in the debate. Likewise, Bushido had its route shifted and began to focus on “Butoku (martial virtue).” Indirectly, it became known as the origin of militarism in later times.

Key words: Meiji Bushido, Gendaitaikasoron, Ukita Kazutami

* Professor, Department of Applied Japanese, Chung Hua University

臺灣大學學術期刊資料庫

明治武士道に関する一考察
—『現代大家武士道叢論』と浮田和民における武士道

簡暁花*

要旨

明治期、忠孝を頂点とした明治武士道も徐々に確立し浸透しながら、世界大戦期間には政治的宣伝までも行われた。さて、明治の武士道は如何にして帝国という新しい時代の道徳から軍国主義の精神へと変わりつつあったか、が見逃せない問題となっている。従来の明治武士道の研究では、明治武士道の中身について触れているが、武士道の国家主義との融合や、国民道徳や西洋化との関係から論ずるものがほとんどで、武士道自身の変化があまり言及されていない。本研究はこの時期の『現代大家武士道叢論』と浮田和民の武士道論説を対象に、新たに検討してみる。その結果、次のことがわかるようになる。佐藤対浮田論争は、実際はキリスト教価値観を持つ浮田和民が武徳中心の武士道に改革を起こそうと挑戦していたことである。浮田は工商業向けの人格や道徳を中心とした武士道を主張している。明らかに、彼の武士道論はこの論戦で挫折を受けた。そのことは、軍部にある武徳中心の武士道が多々認められるようになって同意を得たことをも同時に意味している。武士道はそこで武徳中心へ屈折していき、やがて後々にある軍部が進めていく軍国主義の源となったと言えるだろう。

キーワード：明治武士道、『現代大家武士道叢論』、浮田和民

* 中華大学応用日本語学科教授

臺灣大學學術期刊資料庫

明治武士道に関する一考察
ー『現代大家武士道叢論』と浮田和民における武士道

簡暁花

一、はじめに

日清、日露で戦勝した頃から、新しい時代における道徳の在りかたや、日本が戦勝した原因などが思想界の議題となっていた。そこで、明治 30-40 年代(1897-1912)頃、修養書ブームと武士道論が散見されるようになった[1]。一方、忠孝を頂点とした明治武士道も徐々に確立し浸透しながら[2]、世界大戦期間には政治的宣伝までも行われた。さて、明治の武士道は如何にして帝国という新しい時代の道徳から軍国主義の精神へと変わりつつあったか、が見逃せない問題となっている。

従来の明治武士道の研究では、明治武士道の中身について触れているが、武士道の国家主義との融合や、国民道徳や西洋化との関係から論ずるものがほとんどで、武士道自身の変化があまり言及されていない。本研究はこの問題に対して、この時期の『現代大家武士道叢論』の佐藤対浮田論争を対象に、分析や研究を通して論じてみ

---

1 明治 30-40 年代(1897-1912)の日本社会で多種多様の修養書が世に問われていた。この修養書ブームに関して、従来からさまざまに研究されているが、筒井清忠（1995)、瀬川大（2005)、王成（2004)、また簡暁花（2014）が参考になる。
また、ほぼ同じ時期に武士道への関心が高まり、数多くの武士道論も続々と世に問われた。これら明治における武士道に関する従来の研究は、例えば、船津明生（2003)、鈴木康史（2001)、簡暁花（2006）、張崑將（2011）などである。詳しくは簡暁花（2016）の注 1-2 をご参考。また、簡暁花（2014）では、新渡戸と植村の武士道論や、武士道とキリスト教が融和した具体的な修養論が論じられている。以上から、武士道に関しては実にさまざまな研究がなされているといえる。しかし、いずれも明治の武士道論説の内実について論じているものであり、武士道論の内実の変化が無視されている。

2 明治武士道の道徳体系の頂点が忠孝であることについて、しばしば明治武士道研究で触れられている。たとえば、アレキサンダー・ベネット Alexander Bennett（2009）では、武士道は「軍人敕論」と「教育敕語」を通して、軍人や臣民の道徳となったとしている。また、拙稿、簡暁花（2016）では、明治の武士道の中核が忠孝であることが指摘されている。

臺灣人文學術期刊資料庫

る[3]。

そこで、まず、この時期にある「佐藤対浮田論」という論戦を手がかりに、この論戦を検討することによって、実は武士道の論点が論戦の主眼であるという事実と内容を明らかにする。さらに、論争の鍵を握り非難を浴びていた人物である浮田和民（1859 年-1946 年）による、この時期の武士道に関する言論に絞って、そこに現れている武士道に関する考えを考察する。最後に、前項の考察とあわせた上で、武士道の主張のこの時期にある屈折した動向を把握してみる。

二、『現代大家武士道叢論』における佐藤対浮田論

今日、明治における武士道論を考えるとき、『現代大家武士道叢論』という論集は見逃してはならないものだろう[4]。この本は明治当時のエリート達による武士道に関する言論を集めたものである。数々の言論の中で、何人の間にも共通して繰り広げられているある論戦の存在が際立っている。この論戦は、陸軍少将佐藤正と早稲田大学教授浮田和民の両者の対立から始まった。佐藤と浮田の争点は、明治 37（1904）年 6 月 15 日に起きた「常陸丸事件」である。そこで、論争の背景をより理解するために、まずこの「常陸丸事件」を簡単に紹介する。

日露戦争開戦後、日本側の戦勝が続き、ロシア海軍のウラジオス

---

[3] たとえば、菅野覚明（2004）、Alexander Bennett（2009）、藍弘岳（2010）である。詳しくは簡暁花（2016）の注 3-5 をご参考。新渡戸稲造を対象に、武士道論が国家主義と融合した部分を重視している。それに対して、簡暁花（2016）では、山岡鉄舟、新渡戸稲造、井上哲次郎の武士道論を対象に、武士道論自身の持っている伝統への反省に焦点を絞り、その論説は儒教を最大の共通点とした伝統思想の再現だと論じている。最新の研究として、張崑將（2016）では、議題の分立から、武士道論を研究しているもので注目すべきであるが、前出したものと同じく、明治における武士道の中身に関心を寄せた研究である。該著書に対する批判が拙稿、簡暁花（2017）をご参考。本研究の場合、明治における武士道の内実や議題にもかかわっているが、それに止まらず、明治の武士道の論争からうかがえる武士道論の内実にある変化に注目して出発したものである。

[4] 『現代大家武士道叢論』について従来はあまり研究されていません。管見の限り、これをテーマとして取り上げているものはないと思われる。また、台湾ではあまり見られにい文献なので、読者の参照と確認の利便性を考えた上、以下の脚注でなるべく原文引用を並べておくことにしたのである。

臺灣大學圖書館

トク巡洋艦隊がついに通商破壊戦を展開し、敵の補給線を遮断する戦略に乗り出した。そして、明治 37（1904）年 6 月 15 日、ロシア海軍が前後して和泉丸、常陸丸佐渡丸、三隻の輸送船を追撃した。死亡者が多く、日露開戦以来最も惨烈なものだと言える。中でも、常陸丸の事件は最も壮絶で、最後に千名以上の海陸軍の将校と兵卒が死亡し、当時指揮官であった須知源次郎は最後に切腹した。その後、残るものも次々と切腹や海中への飛び込みや拳銃により自殺した。彼らの英雄ぶりが当時の日本国民を激昂させ、世論に高評され、戯曲や小学校の唱歌もそれを題材に演出されたり唱えられたりして、それこそ武士道の鏡だと仰がれていた。一方、常陸丸の潔い勇姿に対して、和泉丸、佐渡丸の事件では、後の統計報告によると、最後はそれぞれ数十名の士兵が捕虜としてロシアへ収容されたという。言い換えれば、同じ敗者だが、和泉丸、佐渡丸のほうはかなり遜色があると見受けられる。そのことで、軍人は一体、名誉のために戦うのか、または義務のために戦うのか、また、大勢が判明した最後のとき、自決すべきか、または敵の捕虜になるべきかをめぐってエリート輿論の間で論戦が繰り広げられていた。

そもそも、火種となったのは、明治 37 年（1904）年 9 月 18 日に開催された東京市教育会第一回講談会の中で、早稲田大学の浮田和民教授が「日露戦争と教育」を題にして発表した演説である。彼の話によると、最後の肝心なとき、自決は必ずしも軍人の義務ではないという。この発言が即座に論戦の引きがねとなって、真っ先に陸軍少将佐藤正から厳しい批判を受け、また輿論を大きく巻き起こした。

結論として、この論戦は、表では、軍人が何のために戦うかということだが、実質的には武士道のあり方に大いにかかわっているものである。佐藤正は広島藩士の家出身で、武士の大和魂を堅持している。それに対して、浮田和民は熊本藩士の家出身だが宣教師に影響されたキリスト信者で、西洋の倫理政治に詳しい法学博士である。こうした二人が対立しているうち、やがて東京帝国大学教授の井上

臺灣人學術期刊資料庫

哲次郎、東京帝国大学総長の加藤弘之等も次々と論戦に参与した。もともと各雑誌や新聞に載せられていた一連の論戦が後に『現代大家武士道叢論』に収録されて 1905 年に出版されたのである。

『現代大家武士道叢論』という書名の通り、この本は武士道に関する論集である。それが故に、今日明治における武士道を把握するとき、もはや外せない参考対象となっている。特に、中に収められている佐藤正と浮田和民をはじめとした一連の論戦もおのずと必ず分析対象に入れられる。以下では、『現代大家武士道叢論』に現れる順序に従いながら、それらの言論をそれぞれの要点を摘出した上で、逐一検討していく。

（一）佐藤正による非難

まず、陸軍少将の佐藤正（1849 年-1920 年）による批判を確認していく。佐藤正は藩士の家出身であり、日清戦争で自ら出陣し、平壌攻略戦で重傷を受けたことで左足を切断した。こうして国のために貢献し、犠牲となった人物からの浮田和民への批判は以下の通りである。

まず、佐藤によると、名誉のためではなく義務のために戦えという浮田氏の主張には、自分は反対であり、逆にむしろ義務のためでなく名誉のために戦えとしている。軍人にとって、戦死は国への義務だが、いざ軍人が戦場で敵と対戦したとき、その頭でそのような観念的なものを考えるものだろうか。戦争とは、半分が敵と対陣し、半分が敵と殺し合うというものであり、いずれも策略を練ったり殺し合いに集中しなければならないため、義務などといった概念を考えることはありえない。殺し合いの真っ最中に、ただ国の名誉を守れという思いしかない。これが義務かどうかという概念などを区別する余裕はないのである[5]。

[5] 「浮田氏は曰く名譽の爲めに戰ふな義務の爲めに戰へ、と我輩は言はんとす名譽の爲めに戰へ義務の爲めに戰ふなと、成る程軍人の戰場に屍を曝らすは國家に對する義務に相違ない、然も軍人の戰場に敵と相馳騁するに及んで念頭常に斯の如き義務の觀念を存在せしむる事を得るか戰爭は半ば冷靜なるを要すると同時に半ば狂熱を要する、冷かに考ふれば軍人は義務の為めに戰ふの念なきを得ざるは勿論であるが、千軍萬馬の間に敵陣を睥睨するに當つ

ここで、佐藤正は実際戦場で敵と対戦した際の状況から批判をした。彼によると、開戦前の対陣での緊張の中でも、または殺し合いの熱血の中でも、いずれも義務など考える余裕はなく、肝心なとき、ただ国の名誉を守ることに必死であり、浮田氏の主張は「脳裡腐儒」だといい、机上の空論だと批判している。

また、佐藤は戦争と義務についてこのように説明する。

もし戦争を単に義務の仕事だと定義したら、実際多くの戦う人には戦う意志がなく、ただ義務だから銃を撃ち、ただ命令だから行動し、すべては義務という観念に決められているということを意味している。だが、実際、そのような兵士と軍隊はどうやって戦えるだろうか。これもまた机上の空論である[6]。

佐藤からすると、ここでは戦いは軍人の義務でも仕事でもない。なぜなら、仕事だとしたら、自発性がなくなり、勇猛や情熱が足りなくなるからである。

ともかく、佐藤正は軍人の現場経験という立場から、軍人が出陣した際、単に義務や仕事という理性的観念で動くものではなく、逆に、肝心なときこそ、名誉を守るという情熱的意欲に駆り出されており、義務という観念のために戦うという浮田氏の発言は学者の空論だというのである。

（二）井上哲次郎の批判

この論戦で、東京帝国大学教授の井上哲次郎（1855 年-1944 年）が二度も見解を示したことが格別に人の目をひきつけている。井上

て軍人の念頭亦義務の觀念を存するや否や、苟も大和男子の熱血を有するものならば、此時に當つて意氣天を衝き、あはれ此大敵を踏破つて祖國の譽れを全うし、一死以て祖先の名に殉せん哉の慨ある外念頭又何物をも容れぬのである、義務であるか權利であるか、陣頭の軍人は腦裡腐儒の閑問題を容れるゝの餘地がない。」「學者の邪說を破す」秋山梧庵編（1905）『現代大家武士道叢論』東京　博文館　pp.230-231、下引略同。

6 「若し戰爭が單なる義務の仕事となれば、戰爭を爲る人間は嫌々ながら戰ふといふ考へが主となつて來る、義務だから出征もする鐵砲も擊つ、進めといへば進む、死ねと云へば死ぬ、義務だから脫れぬ所と觀念して死ぬ、といつたやうな考へを持つた兵隊ばかりで抑も如何なる戰爭が出來るだらうか奈何に軍事に疎い學者でも大概想像がつくであらう。」「學者の邪說を破す」、同前引、P231。

臺灣大學學術期刊資料庫

はドイツ観念論哲学を日本に紹介し、また教育勅語の擁護者でもある。彼はまず「東京市教育会第二回講談会」の中で、「浮田佐藤両氏の論争について」を題にして演説を行った。その内容が『日本』という雑誌に収録され、また後に『現代大家武士道叢論』に収められている。以下では、井上による演説の重点を分析していく。

井上によると、軍人は名誉のためでなく、義務のために戦えという浮田の説は、ちょうど義務と名誉を反対側に対峙させており、しかも説明が足りないという。井上は、義務は法律用語であり、倫理学的に言うと、それは本務だと主張する。軍人は本務として戦死したが、それを佐藤が名誉のために戦死したとしている。それに対して、井上の考えはこうである。そもそも、名誉というものは本務を尽くしてから発生したもので、本務のための戦死は同時に名誉の戦死だといえる。言い換えれば、軍人が名誉のために戦死したということは、本務を尽くしたために戦死したことだといえるのである。それに基づいて、浮田が名誉のために戦死することを反対した説はあまりにも単純すぎると批判した[7]。

ここで、井上は浮田の言葉使いに問題があることを指摘し、倫理学の用語である「本務」という当為の考えで処理すべきだとしている。「本務」という当為で考える場合、名誉は「本務」の行為から派生したものになり、本務と名誉、両者の対立はなくなるのである。

その次に、井上は降参した捕虜に対してこのように主張する。

金洲丸や常陸丸事件の最後では、兵士が自決した状況も現れている。決して彼らが敗戦降参を怖がって自決したと決め付けてはならない。ある意味では、むしろ直接降参して捕虜となるのが最も簡単

7 「浮田氏が名譽の爲めに戰死するはいけない義務譽の爲めに戰死すべきであると言て、名譽と義務と正反對に立つが如くに言ひしは少しく言葉が足らぬ、名譽對に對する冷酷なる判斷を以てしたものと謂はねばならぬ、義務といふ言葉は今日法律上に多く用ひられ、倫理學上では本務と言て居る、本務とは人を束縛することでない、軍人の戰死するは軍人の本務として戰死するのである。佐藤少將は名譽の爲めに戰死すると言つたが、名譽は本務を尽くすに依て生ずる、本務の爲めに戰死すれば又名譽の戰死となる、軍人の名譽の爲めに戰死するは即ち本務の爲めに戰死するのであるが故に之を非とするは餘りに簡單過ぎる。」「浮田佐藤兩氏の論爭に就て」、同前引、P236。

で容易なことである。そのため、最後に降参せず自決したものは、卑怯者、臆病者ではなく、それこそ、日本人の本当の精神で、日本の特色なのである。彼らの精神を後世に伝え、代々伝わっていく。こうして自決しても降参しないという強い精神や決心は、決して他の国に征服されるようなものではない[8]。

これまでの井上の話をひとまずまとめると、まず、倫理学の「本務」を浮田の「義務」に取り替えることによって、軍人が本務を尽くし戦死したところで名誉なことになる。言い換えれば、戦死したと同時に「本務」と「名誉」が前後につながっている。「本務」と「名誉」の両者が衝突せずに、「名誉」は「本務」から派生したものになる。その肝心なとき、自決する精神こそが日本の精神であり、代々日本に伝わっている日本人の特色である。要するに、井上の考え方では、浮田の義務説は佐藤の名誉説を果たすものとなる。また浮田の義務説は死んでも屈せずという大和魂を果たすものである。

（三）浮田和民による弁明

一方、戦火を起こした張本人である浮田和民は、かつて「内に立憲主義、外に帝国主義」という自由、民主主義を提唱し、多大な影響を及ぼして、近代日本における大正デモクラシーの先駆者となった人物である。浮田は批判を受けた後でこのように返答する。

まず、浮田は井上の批判には同意するところがあることを認めている。それは「大和魂」の中心が「忠君愛国」であるということである。この精神が明治の開国進取の象徴として、今日の国民像を作り上げ、しかも日本が列強と肩を並べるようにさせたのである[9]。こ

---

8 「金洲丸、常陸丸のことの如きは壯烈の最後にして卑怯、臆病といふべきものでない、あの場合に於て降參して捕虜となるのは容易きことであるに拘はらず、併し決して降參することをせぬは卑怯でもなければ臆病でもない、即ち日本人の真精神が現れたのである、日本の特色である。…（中略）…。是に依て壯烈なる此精神を生存する日本人に傳へる。さうして生存する日本人は又之を子孫後世に傳へることになる、自殺するけれども降參はしない、此強き決心ある故に如何なる場合に於ても他國から決して制服することは出來ぬ。」『日本』『現代大家武士道叢論』「浮田佐藤兩氏の論爭に就て」pp.237-238

9 「余は大和魂の中心的生命は忠君愛國にあると又其の側面的精神は開國進取の氣象にして此の二者は日本の世界列國に冠たる所、而して是れ即ち我が

臺灣大學學術期刊資料庫

こでは、浮田はまず井上と同じく「忠君愛国」、「大和魂」を認めていると示している。そうすると、浮田の所謂軍人は義務のために戦えという説は、「忠君愛国」に反対しろというものではない、とうかがえるであろう。

続いて、浮田はこのように弁明していく。

浮田によると、自分と井上との最大の差は、戦場での自殺という見方にある。浮田の場合、そもそも哲学的に言えば、自殺は一刀両断できるようなテーゼではない。ただ、西洋社会では、自殺をめぐるさまざまな論述がある以上、自分もその見方の一つを挙げて、ぜひとも参考にする価値があるのではないかと考え、また今後、戦場での自殺はもう必要ないのではないか、と考えている。金州丸や常陸丸や佐渡丸事件の中で、自殺した兵士には同情し敬意を払うべきだが、凡て努力した上で、結局自決の道を選んだとは感慨的なものである。自分の場合、どうしても切腹自殺する必要はないとしている。また、浮田によると、井上は自分の降参捕虜説に反対しているが、実は、両者の前提として大きな違いがあるという。浮田の場合、切腹自殺する必要はないという前提が提示されている。それは井上からの批判の間にかなりの差があるのである[10]。

國民の今日ある所以なることを述べたり、井上博士が此の點に於て一言の是非なかりしは先づ之に就て非難すべき所なかりしものと見て差支なかるべし。」　「文學博士井上哲次郎君の批評に答ふ」、同前引、p.242-243。

10 「此の段に於て井上博士と余の間、異論の存する所は單に戰場の自殺と云ふ點に在り、元來哲學上より言へば自殺は是なる乎、非なる乎、決定すべからざる問題なるべし、實際は井上博士の言へるが如く其の自殺の事情如何によりて或は是とせられ或は非とせらるゝものならん、唯だ或る社會に於ては或る種の自殺を稱賛し他の社會に於ては一般に之を非とするの傾向あるは事實なり、余は西洋諸國の人情は其の理非曲直は兎も角も之を一般に非認するの傾向あり、而して文明國の輿論は徃徃傾聽すべき價値ありと述べたりき、余は戰場の自殺に就ても一概に之を是とし若くは之を非とするは何れも中正の議論に非ざることを知れり、然れども余は今日の塲合若くは今日以後の塲合戰場に於て自殺し若くは割腹するの必要あるかを疑へり、余は金州丸常陸丸、佐渡丸等に於ける我が軍人の最後に向つて最も同情と畏敬とを表するものなり、此の事件たるや元來天變地災に非ず、余は唯だ當局者が人事を盡くす能はざりし結果是の如き多數の勇將猛卒をして此の無殘の極に到らしめたる　を慨嘆したりき、然れども余は如何なる塲合に於ても今日の自殺割腹の必要ありと云ふ論に同意する能はざるなり、井上博士は余が此の如き塲合に於て日本の軍隊が敵に降參して捕虜となることを主張したる如くに非難せられたれども自殺割腹の必要なしと云ふ前提と敵に降參せよ捕虜とな

臺灣大學哲學系

ここでは、以下のことがうかがえる。第一に、浮田は自ら「忠君愛国」や「大和魂」に賛同して、それが井上に同意したところだとしている。第二に、浮田は切腹自殺する必要はないという考えに基づいて、敗戦の後、降参捕虜に賛同している。その考えは西洋社会の自殺に対する考えからきたものである。第三に、井上と浮田の差は自殺をめぐる観点に起因している、と浮田は考えている。

ともかく、浮田が根本の上で、自殺に反対したのは、まさに彼自身が言ったように西洋社会の価値観からきたものである[11]。この価値観は、恐らく浮田が青少年時代に熊本洋学校で洗礼を受けてキリスト教に入信し、キリスト教学校同志社で教育を受けて、後にイェール大学に留学したことと大きくかかわっているだろう。また、明治の精神、所謂「忠君愛国」の「大和魂」を認めた上で自論を展開している、とも浮田自身が考えている。

（四）佐藤正による再非難

前述した井上の論説と浮田の弁解が出てから、佐藤正はまた次のように批判を加える。

佐藤によると、まず、自分の名誉説は浮田の義務説とは絶対同じものではないといった上で、さらに、浮田の場合、最後に自殺を選んだ武士道は欧米に学べということを意味している、と批判した。なぜなら、浮田の場合は、欧米の考えと同じく自殺することを生きる勇気のないことと見ているため、降参捕虜を敵国への留学だと思えとしているのである。その発想はキリスト教の個人主義からきたと佐藤が批判している[12]。ここで、自分の名誉説は決して浮田の義

るも不可なしと云ふ結論との間に頗ぶる懸隔あるを知らざるべからず。」「文學博士井上哲次郎君の批評に答ふ」、同前引、pp.243-244。

11 浮田にしてみると、ここでの西洋社会の価値観はおそらく『聖書』やキリスト教の教義を中心とした価値観だろう。

12 「浮田氏の義務説と我輩の名譽説とは決して同じでない抑も浮田氏は義務の爲めに死するは嘉すべきも名譽の爲めに死するは不可、殊に戰鬪不利なればとて我と我が力を以て自殺するは惡い是の如き武士道は歐米に學んで改めねばならぬ、歐米人は之れを勇氣缺乏又罪惡と云ふ當世の教育家は能く此點を心得よ。又假令俘虜となつても恥ではない敵國に留學に赴いた思へ云云といふのである、是れ即ち耶蘇教的個人主義より説き來るのである。」「再び

臺灣大學圖書館

務説と混同してはならないと主張する。それは紛れもなく井上の両者の調和論に対するバッシングだと見受けられるであろう。

次に佐藤は、大勢が決定してから、切腹自殺することは純潔なる「忠孝主義」で、大和男子なら責めることはない、と言っている。ここでの自殺は「忠孝主義」に等しく、日本人の共有した価値観である[13]。言い換えれば、浮田による自殺への質疑は、日本の「忠孝主義」への質疑だと、批判しているのである。

また、佐藤は明治 15（1882）年明治天皇より賜った「軍人勅諭」の「ただ一途におのれの本分たる忠節を守り、義務は山より重く、死は羽毛より軽いと覚悟せよ。その志操を破り、不覚をとって汚名をうけることのないように」という一節を引用して説明している。よって、その考えは決して浮田氏のような個人生存主義に基づいた義務のための仕事というようなものではない。名誉心こそ、日本軍人の強い心の素養であって、永遠不滅なものであるとしている[14]。要するに、佐藤の見方は、実は「軍人勅諭」にある一節からきたものである。それによって、軍人なら最後のときには自己犠牲を覚悟し、降参は無節操で不名誉になるというのである。

以上から、次のことがわかる。第一に、佐藤から見ると、自身の名誉説は浮田の義務説と調和できるようなものではない。第二に、佐藤正の自殺による名誉保全の考えは、「軍人勅諭」、「忠孝主義」が根拠となっている。第三に、浮田の説は、キリスト教の個人主義を根拠とし、しかも武士道を欧米に学ばせようとしている。とにかく、

浮田氏の辯論に就て」、同前引、P248。

13 「時の情勢次第寧ろ花々敷割腹するも亦可なりと云ふのである、是れ即ち純潔なる忠孝主義より吾人の信仰を形作つたのである、苟も大和男子ならば誰れか之れを難ずるものあらんこれを難ずるものは決して日本人ではないと思ふ。」『現代大家武士道叢論』「再び浮田氏の辯論に就て」P249

14 「又軍人に賜はり居る勅諭に何んとある乎、曰く軍人は一途に己が本分の忠節を守り義は山嶽よりも重く死は鴻毛よりも輕しと覺悟せよ其操を破りて不覺を取り汚名を受くる勿れと、是れ即ち軍人たるものは浮田氏の如き個人生存主義を本とする限りある義務の爲めのみ働くのではない、尚ほ其上に限りなき名譽の爲めに働くのであるといふ千古不磨の經典ではないか、この勃々たる名譽心は即ち日本軍人をして無限に強からしむる唯一の心的素養ではないか。」「再び浮田氏の辯論に就て」、同前引、pp.249-250。

佐藤正が守りきっているのは、実は「軍人勅諭」である。そもそも、それが「教育勅語」とともに、当時の軍界や教育界では最高の教育原則で、いわばイデオロギーのようなものである。そうすると、佐藤の所謂「忠孝主義」も「教育勅語」と密接にかかわっていることが想像できるであろう。そして、武士道という語彙とほぼ同時に佐藤の言論に現れていることからみると、佐藤の考えでは、武士道と「軍人勅諭」や「忠孝主義」は一つに統合され、また、それは欧米のキリスト教や個人主義と対立したものだと考えられるであろう。

（五）井上哲次郎の再批判

前述した浮田の弁解や佐藤正の再批判のほか、井上哲次郎も再び批判の意見を示している。

井上によると､そもそも西洋では自殺に対して定説はないままで、たとえばショーペンハウエルの場合、自殺が良くないとは限らないとしている｡西洋人自身でさえ自殺の良し悪しが論断できないのに、西洋人が自殺を認めないと決め付けるなど傲慢である。どうしても西洋人の精神を参考にする場合、自殺を支持する学者のことも参考にしろ、と井上は主張するのである[15]。ここでは、要するに、井上は自殺論で有名な哲学者のショーペンハウエルを例とし、浮田の西洋を参考にする見方に問題があると指摘している。

また、浮田が切腹自殺に反対したのは、ただ西洋人に笑われることを恐れているからで、西洋人の前に名誉を守りたいからだという[16]。要するに、浮田が西洋人から名誉を守ることで名誉保全の自殺

---

15 「西洋の學者の自殺に關する說は一定して居るのではない、例へばショッペンハウエルの如きは自殺は惡いとして居らぬ、自殺がなぜ惡いかといふことは中々論斷するに容易でありません西洋人の說はかやう／＼であると一概に論ずることは甚だ僭越であると言はねばなりませんぬ、成程浮田氏の今回辯解せらるゝやうに西洋人のいふのは參考とすべきものであります、特に西洋の學者の言ふことを參考とするは我れ／＼は浮田氏に一步も讓りませぬ。」「浮田氏の答辯を讀む」、同前引、P257。

16 「浮田氏は割腹自殺が西洋人から笑はるゝやうなことであるから今後全く之をよすがよいと斯ういふ議論をしてありますので西洋人から笑はるゝとか笑はれてならぬとかは浮田氏自身最も氣にして居るのであります、それに可笑きことは相洋人の評判を氣にするといふことは西洋人に對して名譽をたもつのを氣にするのであります、所が軍人が名譽の爲めに戰死するはいけ

に反対していることは、実際自家撞着で自分勝手な論法だと、井上は批判している。

以上、井上の論点は二つにまとめられる。第一に、自殺論で有名な哲学者ショーペンハウエルを例に挙げ、浮田へ反論している。第二に、浮田は名誉保全のための切腹自殺を反対しているにもかかわらず、軍人の名誉保全の自殺に反対している、と批判している。ともかく、井上は浮田の西洋の観点に基づいた切腹自殺反対論を痛烈に批判していた。しかし、井上の批判は、以下の二つの事実を避けている。一つは、浮田はキリスト教社会にある一般的な考えである自殺否定論を根拠としていることに対して、井上は部分的な学者による自殺賛成論を根拠としていることである。もう一つは、確かに浮田も名誉保全を重視しているといえるが、名誉保全のために自殺までする必要はないのではないかという考えである。

（六）加藤弘之による意見

幾たびの言論の後で、さらに東京帝国大学総長加藤弘之（1836年-1916年）も論戦に加わってくる。加藤はこのように主張する。

加藤によると、ヨーロッパ人と日本人は、風習が違い、日本人の場合、全く無防禦・無反撃の状態で捕虜になるのは大恥だというのが武士道であり、命を投げるほど戦で全力を出すことこそ快いことであるという[17]。

また、このように主張する。義務や名誉を区別すべきではなく、義務のために死ぬこと自体は名誉なことである。軍人の義務は命を捨てて戦うことで、この義務のために死すれば、軍人には名誉なことになる。軍人は名誉保全のために死ぬことが義務を果たすことに

ないと浮田氏は論ずるのではありませんか、自分の自殺論を立つるには西洋人に對する名譽を楯にして之を立てながら軍人は名譽を目的として戰死してはならぬといふことは自家撞着の甚しきもので實に得手勝手の論法と言はれても致方はありますまい。」「浮田氏の答辯を讀む」、同前引、P260。

17 「歐羅巴人の習慣風俗と日本人の習慣風俗とは其處に於て大分違がある、日本人はさう云ふ防禦の手段全く無き時に於ても捕虜になることは實に恥しいことであると云ふ習慣に育てられて居る、是れが所謂武士道である、さう云ふ時には寧ろ生命を棄てゝ仕舞ふと云ふは眞に快い事である。」「佐藤對浮田論に就き」、同前引、P268。

臺灣人文學術期刊資料庫

なる。両者が、一つのものとなる[18]。ここでは、加藤の所謂義務と名誉が一つになるという説は、実は前述した井上のものと同じであることがわかる。つまり、加藤は井上の調和説に賛同して、間接的に佐藤や浮田に反対しているのである。

とにかく、加藤の論により、この論戦の主旨は実は武士道の価値観への挑戦だということが明らかになった。また武士道は勝敗を決めるために死を恐れずに戦うことを重視しているとし、井上の説に賛同して、義務から名誉が派生するというのである。

以上は、『現代大家武士道叢論』に収録されている佐藤対浮田論戦の文章を材料として、本の編集順序に従いながら、佐藤、井上、浮田、加藤のそれぞれによる論の要点を一通り分析してきた。その結果、以下のようにまとめられる。

第一に、佐藤正は、軍人の経験で浮田の義務説を机上の空論とし、また「軍人勅諭」、「忠孝主義」の武士道を根拠に、名誉のために死することが大和魂だとし、浮田の説は欧米のキリスト教や個人主義であるほかはないとしている。第二に、井上の場合、義務から名誉が派生する折衷調和論を出している。つまり、浮田のいう義務が佐藤の名誉説を果たすことになる。しかも、最後の自己犠牲や死しても屈しないことが日本精神だといい、哲学者のショーペンハウエルの自殺論によって、浮田やキリスト社会の自殺反対論を否定している。第三に、浮田自身は「忠君愛国」や「大和魂」に賛同している。ただ、彼はキリスト社会の価値観によって切腹自殺に反対し、名誉保全は大事だが、命を犠牲にするほどのものではないとしている。第四に、加藤の場合、井上の折衷調和論とほぼ同じで、論戦のキーポイントは武士道の価値観への質疑であると、指摘している。

そこで、以下のことが考えられる。第一に、『現代大家武士道叢論』

[18] 「私は義務と名譽との間に區別を立てるのは誤であらうと思ふ、矢張り義務のために死ぬといふことが名譽になる、軍人と云ふものは命を棄てゝ戰をすべきものであるので、それが義務である、其義務のために死ぬ、それが即ち軍人の名譽になるのだ、ソコで軍人の名譽を全うせんがために死ねばそれが軍人の義務を盡したことになる、それだから兩方から言つて一になつて仕舞ふ。」「佐藤對浮田論に就き」、同前引、P272。

に収録されている佐藤対浮田論戦のキーポイントは、最後のとき、切腹すべきかどうかという武士道の価値観への質疑である。切腹自殺は日本武士道であると一般的に認識されているが、西洋文化が一挙に押し寄せてから、キリスト教の洗礼と西洋教育を受けた浮田の場合、揺るぎが見られている。それに対して、井上はドイツ留学を経験して西洋教育を受けていたが、自殺切腹を支持している。井上と浮田にある差は、恐らくキリスト教信仰を受け入れるかどうか、というところから生じたものであろう。第二に、佐藤正の発言によると、当時、武士道は「軍人勅諭」、「忠孝主義」、「忠君愛国」と密接に繋がっていたことがうかがえる。また「軍人勅諭」が「教育勅語」とともに当時のイデオロギーを構成している。そうすると、武士道はすでに「勅諭」や「勅語」からなっている「忠孝」という道徳体系につながっている。

以上から、『現代大家武士道叢論』に収録されている佐藤対浮田論戦は、表では、和泉丸、常陸丸、佐渡丸の三隻の輸送船の降参や自決事件に関する議論だが、実質的には、キリスト教信仰に影響された浮田が武士道の価値観に挑戦したことで、輿論を巻き起こしたものであることがわかる。その浮田だが、彼自身は「忠君愛国」の「大和魂」を認めていると語っている。さて、そもそも浮田が考えている武士道とは何なのかが次の問題になる。それに対して、次の章で検討していく。

三、浮田和民における武士道について

佐藤対浮田論戦の中で、日本の武士道伝統である切腹に挑んだ浮田和民は、当時自由民権論を提唱した後の大正デモクラシーを開いた重要人物である。彼は早稲田大学で教鞭を執った政治学の学者で、民主主義と君主国家と調和した政体を主張し、『倫理的帝国主義』と名著を著し、1909 年から 1917 年まで「太陽」の編集を担当していた。政治学、社会学のほか、浮田は実は多くの倫理学関係の著作をも世に残した。本研究は佐藤対浮田論戦の後に当たる時期の著作『社

臺灣大學圖書館期刊資料庫

会と人生』と『文明の世』を対象に、武士道に絞って考察を進めていきたい[19]。

（一）1915『社会と人生』の場合

まず、『社会と人生』という本を見ていこう。この本は大正 4 年（1915）2 月に出版されたが、序文では、日付は大正元年（1912）となっており、また、これまで浮田が各雑誌や講義で掲載や公開されている文章を集めたものだと記されている。したがって、この文集にある内容は、実際明治の最後の数年で完成されたものだと見てもよいだろう。つまり、『社会と人生』にある文章は、佐藤対浮田論戦の後の数年で完成したものだといえる。さて、この文集の中を紐解くと、「社會篇」の第一章に（五）「新日本道德」という節があり、新しい時代の道徳と武士道との関係について論述しているものである。以下では、重要な段落を摘出して分析する。

まず、浮田によると、もともと武士道は国家、家族をその道徳目的だとしている。「忠孝」が武士道の道徳の要点であり、君父はその現しとして最も崇敬する対象となっている。しかし、近世文明の場合、国家や家族で社会を構成するというのではなく、社会の構成の最大と最小の単位との間に、つまり、国家と家族との間に、経済社会が発見されている。だが、われわれの学校教育の効用はまだ国家と家族にしか適用されないままである[20]。

ここでは、明治の教育は、武士道が基礎であり、「忠孝」という道

---

19 浮田和民に関する研究は、「帝国主義」論や「倫理的帝国主義」論や社会構想と教育思想に注目しているものが多数である。たとえば、武田清子（1978）、姜克實（2003）、神谷昌史（2009）、石井知章（2013）、栄田卓弘（2015）、神谷昌史（2018）などである。それに対して、浮田和民の人格論や修養や帰一理想に関する研究は少数である。たとえば、小川智瑞恵（1995）と和崎光太郎（2012）と姜克實（2018）である。しかし、いずれも、浮田和民における武士道について論じられていない。

20 「元來武士道の德義は國家的若くは家族的德義にして、直接間接家族若くは國家を以て其の道德の目的と為すものである。故に忠孝は此道德の骨子にして君父は實に此道德の具體的神像に外ならぬ、然るに近世文明の傾向は家族及び國家を以て凡ての社會とは為さず、一は人間社會の最小なるもの、一は其最大なるものとなし而して平生人間活動の重なる部分は家族と國家との間に於ける種々なる經濟社會に在ることを發現せしめた。…（中略）…。我國の學校教育に於いて有効に教へ得る所のものは此二ッに外ならぬ様である。」浮田和民（1915）『社会と人生』　東京　北文館 p.90-91、下引略同。

臺灣大學日本語文學系

徳体系のものだが、経済社会に及ぼすことはできないことが指摘されている。それについて、また次のように論じられている。

現在では、士族階級が崩壊し、平民と同じようになっている。「勅語」にあるように、ひとたび緊急事態が起こったならば義勇の心をふるい起こして公のために尽くすという武士階級の道徳はすでに効力がなくなっている。仏教、儒教、キリスト教は衰退したり、不振だったり、勢力になっていなかったりするので、現在、国民の状態が極端な個人主義にあるものだといえる[21]。

ここでは、武士階級制度が崩壊した後、過去の武士社会にある武士道の効力も限られるようになっていく。しかも、その代わりになるような道徳体系が未だないため、社会では極端な個人主義が漂っている、としている。それについて、浮田は次のように言う。

わが国はイギリスのように近世社会に適用する具体的な制度がまだ発展しておらず、実施されていない。ただ、紳士道より高尚で抽象的な人格理想で、人々を教化することを推奨することはできる[22]。その人格は、以下のように説明されている。

倫理的な定義で言えば、人格については、人としての価値を認識することであり、人として事物と異なる部分の自覚を持っていることである。人としての価値とは、男女貧富の差がなく、一切平等、ということである[23]。つまり、人格とは、誰でも平等で持っているという人としての価値である。それについて、また次のように言う。

戦国時代には、人は武器に頼って人格の独立を保ち、武勇や節義を重視し表現することによって人として互いに尊重し合う道を保っ

---

21 「今や士族の階級瓦解して平民と別つ所なく、一旦緩急ありて義勇公に奉ずる場合の外所謂武士道の道徳は餘り其効力がなくなつたのである。而して佛教衰へ儒教振はず、基督教未だ勢力あらざるが故に、平日の場合に於て我國民ほど極端なる個人主義者は他にない程である。」同前引、P92。

22 我國にては英國に於けるが如き近世的社會に適合せる具體的理想を以て一般人民に臨む が出來ないから英國の紳士道よりも一層高尚にして且つ抽象的なる人格の理想を奬勵するの外ないのである。」同前引、P94。

23 「人格とは何ぞや、倫理的定義によれば人格とは人間の價値を認識して其事物と異なる所以を自覺するの謂である。…（中略）…。人たるの價値に於ては男女平等、貧富無差別である。」同前引、p.94-95。

臺灣大學博碩士論文

ていた。しかし、現在、われわれの武器はもはや、刀や武勇ではなく、黄金や信用となっている。要するに、過去の武士社会では武器や武勇、節義で人格としての尊重を保っていたのに対して、現代社会では貨幣と信用に頼っているのである[24]。その倫理について、次のように述べる。

現在、全国の小中学では、「忠君愛国」の教育が行われている。これは戦争時代の教育としてはいいが、それは常に工商業の階級を見下しているため、全体としての社会道徳が劣れている。「忠君愛国」という教育は、その階級性が原因で、現在の社会道徳全体へ押広めることができない。そもそも、忠孝という道徳の源が武士道であることもあり、現在重要になってきた工商階級は、武士道社会では完全に軽蔑されていた[25]。したがって、武士道では、工商階級への応用は乏しい状態のままである。また、次のようにいう。

維新以来の改革や教育は、武士階級のみに限られているものである。それはただ今日までの成功を見るように、武士道の精神を一般の人々へと普及しただけのものである。だが、今後のことは、単に武士道の理想を維持するのみならず、それをさらに拡充して国際工商業での実現も果たすべきである[26]。つまり、浮田の考えでは、武士道を退けるというのではなく、武士道の道徳の応用範囲を拡大しようとするというのである。

以上、『社会と人生』における武士道について考察してきた。そこで、以下のようにまとめられる。第一に、浮田は昔の武士道を批判

---

24 「戰國時代に於て人格の獨立を保たんとする者は先づ武器に依頼せねばならなかつた。武勇を顯はし節義を重んずる者は人として互に相敬するの道を全うする を得た。今や吾人の武器は刀劍に非ずして黃金である、武勇に非ずして信用である。」同前引、P96。

25 「然るに全國の小中學校に於ては單に忠君愛國の一點張りにて、戰時の倫理教育のみ最も有效なりとせば我社會道德の劣等なるは固より怪しむに足らぬ次第である。何となれば往昔我國の商工業者は一般に蔑視せられて士人の階級に齒するも出來ず。」同前引、P98。

26 「維新以來の改革及び教育は維新前に於て全く武士の階級に止まりたる武士道の精神を一般人民に普及せしめ、以て今日までの成功を見たるが如く、今日以後の改革及び教育は單に武士道の理想を維持するのみならず、之を擴充し又向上せしめて國際的商工業の競爭上に之を實現せねばならぬ。」同前引、p.100-101。

臺灣大學學術資源

していたが、武士道自体をすべて否定したのではない。第二に、過去の武士道は君父忠孝を頂点としていた体系が国家や家族に適用されていたが、経済社会を主体とした現在社会には限界がある。第三に、伝統的な武士道は、武士階級が主であって工商階級が蔑視されていたため、武士道をそのまま今の社会には使えず、武士道を今後工商業にも適用するという分野を発展させていくべきである。さて、武士道を如何にして経済社会に適用するのかについて、節を変えてからまた具体的に考察していこう。

（二） 1915『文明の世』の場合

浮田和民の著作の中には、さきほどの『社会と人生』とほぼ同時期で、しかも性質も近いというもう一つの著作『文明の世』がある。大正三年（1914）に書かれた序文から、この本は浮田のさまざまな論文や雑誌などに掲載されている文章が収録されたものであることがわかる。『文明の世』の第三章第二節「武士道及び其將來」には、はっきりとした武士道への考えが示されている。以下では、その要点を確認していく。

まず、武士道は近世の封建制度に応じたものであり、幕府の最高道徳である。その餘韻が残り今日の国民性をつくりあげていた。武士道の美善なる風習を保つ必要があるが、幕府が終わってからの四民平等の現在では、封建時代の風習は道理にかなわなくなる[27]。

また、その武士道について、以下のように分析する。

武士道は忠義や名誉を重視し、生死の肝心なひと時に人に卓然とした選択をさせる効力を持つ。それは武士道の長所である。しかし、武士道は、武勇に偏って武徳以外の人格を無視した傾向がある。封建時代では、平民と婦女が蔑視されたり、官尊民卑であったりして、

[27] 「武士道は近世的封建制度に適應する様に發展したもので幕府時代にあつては最高の道徳であつた。加之其流風餘韻は今尚存し現今の國民性を為して居るから、其美風俗善習慣は永遠に保持しなければならぬけれども、幕府廢して四民平等なる現代の社會に於て封建時代の風俗習慣が悉く道理に合するものではないのである。」浮田和民（1915）『文明の世』　東京　博文館　P130、下引略同。

臺灣大學學術期刊

今でもその欠点がまだ残っている[28]。言い換えれば、過去の武士道は武士階級にのみ属する道徳であり、武徳を偏重してほかの階級を蔑視することが欠点である。それについて、以下のように主張する。

武士一点を高めて商人を蔑視した結果、工商業が発展する際に必要となる実業道徳の養成が困難となり、日本の将来の国民に悪影響を及ぼしていく[29]。そして、以下のように続ける。

武士精神を進化させるべきだとしている。忍耐の勇を「忠孝信義」へと拡張させ、すべての人を「忠実信用」へ転化させ、武士道の名誉を経済の上での信用へと変身させ、戦死する勇気を、忍耐力や根気力によって最終的な成功を収めるよう挑戦するレベルまで高めていくべきだとしている[30]。

以上、浮田の『文明の世』における武士道を考察してきた結果、以下のようにまとめられる。第一に、武士道は封建時代の産物で、忠義や名誉を重視するものである。第二に、武士道は武士階級の道徳であり、武徳を重視している一方でほかの階級を蔑視しているため、四民平等や経済社会の明治には、工商業の道徳が欠如し、相応しくないものである。第三に、武士階級の道徳とした武士道を凡ての人の道徳へ改造すべきであり、名誉重視の精神を商業の信用へと転化させ、英勇戦死を成功にいたるまでの忍耐・根気に変身させるべきである。ともかく、武士道が全般的に否定されているというのではなく、ただその武徳偏重や名誉維持のための戦死などのみが批判されている。今後の武士道は、過去の名誉戦死というよりも、む

---

28 「武士道は忠義及び名譽を重んじて人をして死生の間に卓立せしむる効力あるは其長所として永遠不磨の要素である、けれども其れと同時に武勇を偏重するよりして武徳以外の人格を無視する傾向がある。封建時代に於て平民及び婦女子が一般に蔑視せられ、而して其の弊風の今に存することは官尊民卑の弊風と共に我社會道徳の一大缺陥である。」同前引、P135。

29 「武士を尊び商人を蔑視した結果商工業に必要なる實業道徳を養成するに困難である、而して此短所は實際將來に於ける我國民の發展に最も惡影響を及ぼすのである。」同前引、P136。

30 「武士的精神を進化せしめて武力の勇を忍耐の勇となし、忠孝信義を擴充して凡ての人に對する忠實信用たらしめねばならぬ、而して武士道の名譽を經濟上の信用に轉化せしめ、討死の勇氣を向上せしめて忍苦、耐久、最終の成功を制する勇氣たらしめねばならぬ。」同前引、pp.136-137。

しろ、経済での信用重視型へ、成功を収めるための忍耐や根気へと変えるべきだとしている。なぜなら、時代が変わり、武士の代わりに、四民平等が主流となっているからである。そのため、過去の武士道にある大和魂は、武勇の魂、軍人の魂に偏っていると浮田は主張し強く批判している。そして、現在は、武士道は武士の武徳や武勇の魂というものから、商人の魂や一般国民の魂や人格へ転換すべきだとしているのである。

四、結び

以上では、『現代大家武士道叢論』にある佐藤対浮田論戦と、その論戦の核心人物である浮田和民の『社会と人生』と『文明の世』における武士道についてそれぞれ考察してきた。そこで以下のことがうかがえる。

第一に、佐藤対浮田論戦は、表では、軍人の敗戦の末、降参するか、自殺するかをめぐるエリート達による議論だが、実際はキリスト教を根拠とした浮田和民の価値観と武士道の価値観にある切腹自殺とで、両者がぶつかっているものである。輿論の内容からすると、明らかに当時、武士道の切腹を認めている価値観が多数派であって、浮田の価値観は極少数である。第二に、浮田は切腹反対だが、当時のイデオロギーの「忠孝」に制限されていることもあり[31]、武士道の大和魂などを反対していない。彼は、ただ武徳中心の武士道のみを反対している。第三に、浮田が主張している新しい武士道とは、四民平等、工商業重視の社会に相応しい商魂や人格を中心としたものへ切り替えるべきだというものである。なぜなら、武徳中心の武士道が過去にあった封建時代のものだからである。

一方、以上の考察からこのように推察される。武徳偏重の武士道

[31] 浮田は熊本バントのキリスト教信者である。周知の通りに、教育勅語が発布されてから、不敬事件をはじめ、キリスト教陣営への圧力が大きくなっていた。が、実際、この時期のキリスト教信者は結局、天皇制イデオロギーに妥協したり「馴化」されるものが多かった。浮田もその一人である。キリスト教信者と天皇制イデオロギーとの「馴化」関係については、簡暁花（2018）の2本の論文をご参照。

臺灣大學學術期刊

を批判して改革しようとする浮田は、当時、輿論ではしばしば非難の的となっていた。同じ学者である井上と加藤は、折衷調和論を切り出して手助けをしたように見えたが、井上と加藤はいずれも切腹自殺の大和魂を保留している。言い換えれば、武士道を広く商人、平民へ推し進めるという浮田の考えは否定されていないかもしれないが、武徳中心にある名誉のための切腹自決を否定するという浮田の考えは、明らかに輿論に認められずに、完敗したといえるであろう。ともかく、後の『社会と人生』と『文明の世』からみると、佐藤対浮田論戦の中で、実は、浮田が西洋思想と基督教信仰によって、武徳中心の武士道の欠点を指摘し、さらに武士道の改革へ共感を呼び起こそうとしていたことも十分見受けられる。ただ、軍人側をはじめとした猛烈な反撃から、そのような呼びかけは、結局不毛のままとなっているのだろう。

当時、「忠孝」という教育方針は「勅語」を通して武士道と合体し、国へ浸透していた。時代が変わり、外来思想の刺激を受けた人々、たとえば、浮田和民の場合、彼は武士道を平民のための武士道へ転換するよう反省しはじめていた。しかし、最終的に、武士道の中核は依然として武徳のままである。もともと武士道とは文武両道のものであるが、明治になってから、国が「忠孝」を中心価値と公に位置づけしている。すると、浮田のこの論戦中での失敗は、たとえ封建制度が崩壊しても、明治の主流意識はその実質が武徳中心の武士道である、ということを物語っている。逆に言うと、佐藤対浮田論戦の中で、武士道は議論を通して武徳脱却の可能性を些か孕んでいたが、浮田の敗北により、この改革や挑戦の動きも当然挫折を受けた[32]。それどころか、武徳中心の武士道がそこで、日本精神として輿論の多数に認められるようになった。この論戦での再確認により、武士道は武徳中心へ屈折していき、やがて後々にある軍部が進めていく軍国主義の源となったということがわかるだろう。

[32] ある意味では、この時代にあって、浮田が忠君愛国を認める、いわば妥協的な新道徳の提起にとどまったことに限界があったとはいえる。

臺灣大學學術期刊資料庫

【付記】本稿は「2016 年度輔仁大学日本語文学系暨台湾日本語文学会国際学術研討会」(輔仁大学日本語文学系、台湾日本語文学会、2016 年 12 月 17 日)と、「2017 年台湾大学日本語文創新国際学術研討会」(台湾大学日本語文学系、2017 年 12 月 9 日)における発表原稿を書き直したものである。

【参考文献】

姜克實(2018)「浮田和民の帰一理想－帰一協会との関わりについて－」見城悌治編『帰一協会の挑戦と渋沢栄一:グローバル時代の「普遍」をめざして(渋沢栄一と「フィランソロピー」2)』京都　ミネルヴァ書房 pp.54-75

簡暁花(2018)「跨世紀的新透視：再論被馴化的明治國家意識型態下的日本基督教徒兩大類型」『師大學報』「日本明治維新一百五十週年」第 63 卷第 2 期　台北　國立臺灣師範大學 pp. 1-22

簡暁花(2018)「初論被馴化的明治國家意識型態之展現：以松村介石之「道」為例」『臺灣東亞文明研究學刊』15 卷第 1 期(總第 29 期)　台北　國立臺灣師範大學東亞系 pp. 153-179

神谷昌史(2018)「浮田和民の社会構想と教育思想-言論活動出発期から倫理的帝国主義提唱期まで」『滋賀文教短期大学紀要』20 滋賀　滋賀文教短期大学 pp. 1-10

簡暁花(2017)「評張崑將教授之《電光影裏斬春風：武士道分流與滲透的新詮釋》」『文化研究 Router: A Journal of Cultural Studies』24 新竹　國立交通大學出版社 pp.196-205

張崑將(2016)『電光影裏斬春風: 武士道分流與滲透的新詮釋』　臺北　國立臺灣大學出版中心

簡暁花(2016)「《坂の上の雲》之武士精神-與明治期武士道之比較－」、『思與言』(54) 1　台北　思與言雜誌社 pp.59-89

簡暁花(2016)「明治 30-40 年代における武士道論に関する一考察－

臺灣大學學術期刊資料庫

伝統思想への反省を中心に－」『台大日本語文研究期』31 台北 台湾大学日本語文学系 pp.129-153
栄田卓弘（2015）『浮田和民物語』 東京 日本評論社
簡暁花（2014）『新渡戸稲造研究－『修養』の思想』 台北 南天書局 pp.75-90 pp. 71-73
石井知章（2013）「浮田和民と「倫理的帝国主義」論」 『アジア太平洋討究』19 東京 大東文化大学国際比較政治研究所 pp. 89-102
和崎光太郎（2012）「初期丁酉倫理会における倫理的<修養>：姉崎正治と浮田和民に着目して」『教育史フォーラム』38 京都 教育史フォーラム・京都 pp. 3-17
張崑將（2011）「明治時期基督徒的武士道論之類型與內涵」『台大文史哲學報』第七十五期（臺北：台灣大學文學院）pp.181-215
藍弘岳(2010)「近現代東亞思想史與「武士道」: 傳統的發明與越境」、『台灣社會研究季刊』85 台北 台灣社會研究國際中心 pp.51-88
アレキサンダー・ベネット Alexander Bennett（2009）『武士の精神とその歩み－武士道の社会思想史的考察－』京都 思文閣出版 pp.229-231
神谷昌史（2009）「民衆・群衆・公衆--浮田和民の民衆観とデモクラシー」 『国際比較政治研究』18 東京 大東文化大学国際比較政治研究所 pp. 76-92
簡暁花（2006）「析論植村正久之基督教與武士道關係」『東華人文學報』第八期 花蓮 國立東華大學人文社會科學學院 pp.149-172
瀬川大（2005）「「修養」研究の現在」『研究室紀要』31 東京 東京大学大学院教育学研究科教育学研究室 pp.47-53
菅野覚明（2004）『武士道の逆襲』東京 講談社 pp. 260-281
王成（2004）「近代日本における＜修養＞概念の成立」『日本研究 国際日本文化研究センター紀要』29 東京 岩波書店 pp. 117-145
姜克實（2003）『浮田和民の思想史的研究:倫理的帝国主義の形成』東京 不二出版
船津明生(2003)「明治期の武士道についての一考察—新渡戸稲造『武

臺灣大學學術期刊資料庫

士道』を中心に―」『言葉と文化』4 名古屋　名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻 pp. 17-32
鈴木康史（2001）「明治期日本における武士道の創出」『筑波大学体育科学系紀要』24　つくば　筑波大学体育科学系 pp. 47-55
筒井清忠（1995）『日本型「教養」の運命－歴史社会学的考察－』東京　岩波書店 岩波現代文庫所収（2009）
小川智瑞恵（1995）「浮田和民における人格論：キリスト教理解とシンクレティズムをめぐって」『日本の教育史学：教育史学会紀要』38 東京　教育史学会 pp. 78-96
武田清子（1978）「浮田和民の「帝国主義」論と国民教育：明治自由主義の系譜」『国際基督教大学学報. I-A, 教育研究』21　東京　国際基督教大学 pp. 1-27
浮田和民（1915）『社会と人生』東京　北文館
浮田和民（1915）『文明の世』東京　博文館
秋山梧庵編（1905）『現代大家武士道叢論』東京　博文館

臺灣大學學術期刊資料庫